

## 「ヒューマン・アニマル・ボンド」(協同組合通信/風雪弾) 15.2.27

「ヒューマン・アニマル・ボンド(HAB)」という耳慣れない新しい科学がある。

人間と身近な動物達との相互作用が、様々な分野で人の心身に素晴らしい癒しや機能回復等の効果を与えるという。動物の中でも特に、犬と猫がコンパニオンアニマルと呼ばれ白眉だ。

少子高齢化が急速に進行する核家族の日本。人口構成の変化以上に気がかりなのが、簡単な挨拶やコミュニケーションを上手く出来ない社会になっていることではないか。ドライになった人間関係に悩み傷つきもがいている現代の大人から子供達まで、その原因がどこにあるのかを啓示する、一つの確かな解決策をもった科学であると直感した。

我が国の斯界の先駆者で、自ら動物病院を経営しその実践に日々意を尽くされている加藤院長に直接お聞きした。

この科学はワシントン州立大学に始まり、獣医科の学生に犬の心理・行動・習性・しつけ方等、長く教育を通じて人と動物の絆の関係を研究発展させてきた。一つの印象的な話がある。人を含む哺乳動物の脳の発達過程で、社会化期という極めて重要な時代がある。乳歯から永久歯に生え変わる頃、人の場合ほぼ10歳までに脳への刷り込み効果で、一生の情緒や感性等が決定するという。

記憶力・理解力・系統だった思考力等はそれ以後に前頭葉の発達とともに本人の努力次第で育つが、無意識の時期に情感や社会的適応力が、その環境に左右されるという。

この時期に家族を含む地域社会が、動物との正しい相互作用を持つことが、最も大切かつ決定的な要因であると前述の大学で証明・報告され、先進国で広く評価されている。

親子・兄弟・子供同士の日々のしつけ、暮らしや遊びの中で、犬猫や自然とふれあい、五感を通しての思いやり、基本的な社会のルールを無意識のうちに脳に取りこんで行く。

この科学の普及と応用の為、NPO 法人の認可を受けた。主に家庭犬の正しいしつけ方の訓練やその指導をするインストラクターの教育・育成を梃子にして、アメリカと連携し全国的に進める。理解のある小学校や社会福祉施設で実証して行く。

( 気象情報システム株式会社 高津 敏 )